慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話（3353）1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　１回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

第92回 慶應医学会総会開催

8名が三四会奨励賞を受賞

平成24年11月2日（金）午後13時30分より、慶應義塾大学病院新棟11階大・中会議室において、第92回慶應医学会総会・シンポジウムが開催された。

今回は「免疫統括医療センター開設3周年記念シンポジウム」「免疫難病に対する早期探索的臨床試験拠点整備事業記念シンポジウム」も併せて開催され、シンポジウムでは免疫疾患にフォーカスした講演が行われた。

末松誠慶應医学会会長・医学部長の開会の辞により開会し、続いて平成23年総務報告・平成24年中間報告（末松会長）、平成23年会計報告・平成24年中間会計報告（岡田理事）、平成25年予算（案・末松会長）が行われ、承認された。

その後、三四会奨励賞授与式が行われ、比企能樹三四会長より8名の受賞者に表彰状と副賞が授与された。

今年度は臨床医学部分野から2名、基礎医学分野から8名の三四会員が受賞した。特に、基礎医学分野の中でも幹細胞に関する研究が目立つなど、再生医療において日本及び世界を先導する立場にある、慶應医学を象徴する若き研究者たちが受賞対象となった。

医学会総会と併せて開催されたシンポジウムでは「サイトカインを標的とした免疫難病の治療―生物学的製剤によるパラダイムシフト―」をテーマに、京都大学・三森経世教授、皮膚科・天谷雅行教授、消化器内科・日比紀文教授、大阪大学免疫学フロンティア研究センター・岸本忠三教授による講演とシンポジウムが行われた。このシンポジウムの様子は次号（12月号）にて掲載予定。三四会奨励賞受賞者からのコメントは2面に掲載している。

Ⅰ 臨床医学分野

1．高橋　勇人（皮79回）
「デスモグレイン３反応性T細胞による新規自己免疫性皮膚炎モデルの確立」

2．藤岡　正人（耳81回）
「トランスレーショナルリサーチに向けた病態生理に基づく新規内耳性難聴モデルの樹立とその解析」

Ⅱ 基礎医学分野

1．金田　勇人（生81相当）
「COUP-TFIおよびIIは中枢神経系の発生における神経幹細胞の分化能の正常な時系列的変化に必須である」

2．高橋　洋平（整83回）
「ゲノムワイド相関解析で、思春期特発性側弯症と関連する遺伝子多型を*LBX1*の近傍に発見する」

3．湯浅　慎介（内78回）
「多能性幹細胞を用いた循環器疾患治療方法開発の研究」

4．奥野　祐次（整85回）
「病的血管新生に特異的な血管内皮増殖機構の解明」

5．油井　史郎（内81回）
「大腸上皮幹細胞の新規対外培養技術の開発と、培養大腸上皮幹細胞を用いた大腸上皮再生」

6．笹部　潤平（解81回）
「D-アミノ酸酸化酵素はD-セリンを介して運動神経変性を制御する」

2012連合三田会大会開催

本年は10月21日、「My School My Home」という開催ステートメントで、中瀬雅道大会実行委員長（1972年経済学部卒）のもとに開催された。本年は慶應讃歌に謳われている「我等が校庭に集いたる」、「月去り星は移るとも夢に忘れぬその名こそ」という想いで再び母校に集まろうという願いを込めて開催ステートメントが考えられた。

当日は好天にも恵まれうららかな秋の陽射しの中、1万7千人を超える多くの来場者で日吉キャンパスがにぎわった。三四会としては、3回目の講演会を例年と同じ独立館D203教室で開催した。前号でお知らせしたように「メルボルンへの30㎝―渾身のラストストローク」と題した1956年のメルボルンオリンピックボートエイト代表を讃える講演会で、ロンドンオリンピック開催の本年に合わせた三四会としては2年越しの企画であったが、会場は立ち見の出るほどの大盛況となった。

比企能樹三四会長はじめ当時のオリンピッククルー達の熱い語りが、民放各局塾員の援助のもとに作られた当時の再現映像と共に来場者の感動を呼び、まさに連合三田会大会にふさわしい思い出に残る講演会となった。また本年は当番学年の大会委員として参加した63、71回生を中心に無料健康相談も行われた。来往舎1階ギャラリーという人目をひく場所で開催されたこともあり、会場は終始5名ほど待ち人がいる大盛況であった。このような中例年の如く63、71、73回生を中心に救護活動も行われたが、幸いなことに救急車を要請するような重篤な救急患者が出ることもなく、無事に大会を終了することができた。

以上のように本年は、当番学年の三四会員にとっては、従来の救護活動に加え講演会、健康相談のイベントと忙しい連合三田会大会となったが、50名を超える当日参加者と三四会理事の協力のもと大成功の結果で大会の幕を閉じることができ、三四会の目指している医学部のエンティティの確立に貢献できたと確信している。

最後に毎年のことながら連合三田会当番学年の三四会員と日吉の保健管理センターの皆様には、荷物の搬送、後片付け等で大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

（古梶清和　63回　記）

比企会長をはじめとしたボートクルーによる講演会

平成24年度 三四会全国支部長会

平成24年度三四会全国支部長会が、9月29日（土）18時より京王プラザホテルで開催された。

開会の辞の中で比企能樹会長は、三四会各支部の活発な活動が慶應医学の発展を支えていると述べた。挨拶では、戸山芳昭常任理事が新病院棟建設計画の進行状況を示し、三四会員の積極的な協力を呼びかけた。続いて末松誠医学部長は、当日開催された医・薬・看三学部合同のワークショップの話題を提供し、慶應義塾における新たな連携教育の可能性に触れるとともに、医学部創立100年事業としての新病院棟建設の重要性を述べた。武田純三病院長は、2012年1月からの電子カルテ導入後の院内の状況、8月にオープンした新3号館南棟の現況を紹介した。予想を上回る病床稼働率の高さに、参加者から感嘆の声があがっていた。また山形県から武田和夫支部長、岡山県から石川博通支部長が各支部の活動状況について報告し、地域医療における三四会の役割について考えるよい機会となった。

次に三四会役員からは、まず川城丈夫評議員会副議長が評議員会（6月16日開催）の報告を行い、今後メールなどを活用して特に若い世代の出席率向上を促し、より活性化するための具体案を述べた。古梶清和理事は、2012連合三田会（10月21日開催）の進捗状況を報告した。今回はメルボルンオリンピック企画など医学部の関与が大きく、多数の三四会員の参加が期待される。意見交換の時間には、各支部でソーシャルネットワーキングサービスを活用するための工夫など、有意義な質疑応答が交わされた。支部長会はリー啓子副会長が司会を務め、水野嘉夫副会長の閉会の辞で締めくくられた。

引き続き19時より懇親会が開催された。福井県の宮崎茂和支部長の乾杯で開始され、和やかに歓談が進む中、各支部の代表から1分程度で近況が報告された。活発な意見交換と交流が続く中、末岡浩副会長の閉会の辞で名残を惜しみつつ散会となった。懇親会の司会として三四会のつながりを実感させていただき、私にとっても忘れられない一夜となった。

（山上　淳　77回）

特別インタビュー

仕事場は宇宙

～医者が宇宙に行くということ～ 前編

宇宙航空研究開発機構（JAXA）
有人宇宙環境利用ミッション本部
特任参与、医師・医学博士、宇宙飛行士
宇宙医学研究センター長
向井　千秋（外56回）

聞き手　池端　幸彦（59回）

慶應医学部を卒業後、慶應病院で心臓外科医として働いた経験を活かし、アジア初の女性宇宙飛行士として2度の宇宙飛行を経験した向井千秋さん。現在は宇宙航空研究開発機構（JAXA）で宇宙医学を研究しており、日本（筑波）を拠点に精力的な活動を続けています。そんな向井さんに、医者から宇宙飛行士へと転じた経緯を振り返りつつ、「医者が宇宙に行くこと」についてお話を聞きました。

そもそもどのような経緯で宇宙飛行士になったのでしょうか。

向井　日本で初めて宇宙飛行士の募集が行われた83年、私は慶應病院のチーフレジデントとして働いていました。子どもの頃にガガーリンの伝記を読んだり、アポロの月面着陸に興奮した記憶はありますが、それまでずっと宇宙など自分とはかけ離れた別世界のことだと思っていました。それに、宇宙行士といえばロシアかアメリカの軍人で、男性パイロットだけがなれる職業だと思っていたのです。ところが、NASDA（現JAXA）の募集要項を見ると、パイロットではなく、地球上で科学者かエンジニアといった仕事の経験がある人を宇宙に連れて行くとあります。だからといって、まさか自分がなれるとは思ってはいませんでしたが、選抜試験のひとつとして行う、メディカルチェックとは異なる特殊医学検査というものに興味があったのと、どのような観点で宇宙飛行士を選考するのかを見るだけでも面白そうだったのでチャレンジすることにしました。

私がフレッシュマンのときに向井先生が宇宙飛行士に応募されて、次々と選考をクリアしていると学内では噂になっていました。少しずつ宇宙飛行士が現実になりつつある過程はどのようなお気持ちだったのですか？

向井　宇宙飛行士の選考には1年8カ月もかかり、しばらく入院して検査を行うこともありました。それでも、私の場合は宇宙・航空分野をバックグラウンドとしていないという気軽さがあり、単にワクワクしていましたね。テレビや雑誌でロケットやシャトルを見ると「もしかしたら、あれに乗れるかもしれない」なんて思ったりして（笑）。

医者が宇宙飛行士になれるということは、当時とても意外に感じましたが。

向井　私も、最初は医者が宇宙飛行士になれるなどと思っていなかったけれど、NASAに行ってみると宇宙飛行士の2割以上は医者でした。考えてみると、環境が分からないところに行くとき、何人かのクルーのうち1人は医者がいたほうがいいですからね。クルーの誰かに何かが起こったとしても対処することができますし、医者であれば環境変化に伴う自分自身の体調や状態の異変を冷静に判断できるという強みがあります。なので、宇宙滞在長期記録を更新しているような人はだいたい医者です。その中の一人で、歴史で最も長く、宇宙に438日間も滞在したロシアのポリャコフによれば「体は大丈夫だったけれど、家には帰りたくなった」そうで、肉体のケアができることよりも、最終的には精神的な強さが大事なようです。

当時、宇宙飛行士になるにはポリープやむし歯があってもいけないと言われていましたが。

向井　それは60年代のことで、私の頃にはそんな基準はありませんでした。ジョン・グレンが初めて宇宙に行ったときには、眼球が飛び出してしまうかも、唾液が飲めなくて自分の唾液で窒息するかもという懸念までしたといいます。そういうことをパイオニアたちから聞いていたこともあり、実際宇宙に行くことになっても、不安はなかったですね。そもそもアプライした時点で自分が宇宙に行きたくてアプライしているはずでしょう？

そういうポジティブさを持っているかどうかも選考基準だったのでしょう。

向井　そもそもポジティブな志向性を持っていなければ、応募しないと思いますよ（笑）。私が応募したとき、当時の慶應医学部には自分も宇宙に行ってみたいという人が何人もいたんです。しかし、結局申し込んだのは私一人だけでした。

医者が宇宙飛行士になるということは、当時とても意外に感じましたが。

（笑）。

向井　私も、最初は医者が宇宙飛行士になれるなどと思っていなかったけれど、NASAに行ってみると宇宙飛行士の2割以上は医者でした。考えてみると、環境が分からないところに行くとき、何人かのクルーのうち1人は医者がいたほうがいいですからね。クルーの誰かに何かが起こったとしても対処することができますし、医者であれば環境変化に伴う自分自身の体調や状態の異変を冷静に判断できるという強みがあります。なので、宇宙滞在長期記録を更新しているような人はだいたい医者です。その中の一人で、歴史で最も長く、宇宙に438日間も滞在したロシアのポリャコフによれば「体は大丈夫だったけれど、家には帰りたくなった」そうで、肉体のケアができることよりも、最終的には精神的な強さが大事なようです。

当時、宇宙飛行士になるにはポリープやむし歯があってもいけないと言われていましたが。

向井　それは60年代のことで、私の頃にはそんな基準はありませんでした。ジョン・グレンが初めて宇宙に行ったときには、眼球が飛び出してしまうかも、唾液が飲めなくて自分の唾液で窒息するかもという懸念までしたといいます。そういうことをパイオニアたちから聞いていたこともあり、実際宇宙に行くことになっても、不安はなかったですね。そもそもアプライした時点で自分が宇宙に行きたくてアプライしているはずでしょう？

そういうポジティブさを持っているかどうかも選考基準だったのでしょう。

向井　そもそもポジティブな志向性を持っていなければ、応募しないと思いますよ（笑）。私が応募したとき、当時の慶應医学部には自分も宇宙に行ってみたいという人が何人もいたんです。しかし、結局申し込んだのは私一人だけでした。

【後編は4面に掲載】

宇宙に行ったメダカの子孫たち

筑波宇宙センターに展示されている宇宙食の数々

宇宙酔いの実験をする装置

鑑賞知来

挨拶を広辞苑では「禅家で、問答を交して相手の悟りの深浅を試みること」、「受け答え、応答、返事」、「儀礼的に取り交わす言葉、動作」等とある。

▽院内での挨拶がいつの間にか「お疲れさま」一辺倒になってしまったことを不思議に思っている。朝は「お早う」、昼は「こんにちは」を使っていたときの方が自然であった。また他人の存在を意識して示す非言語的コミュニケーション、たとえば「アイコンタクト」、「黙礼」、「会釈」を大事にしたいと病院の広報誌にも書いたことがある。

▽挨の字の意味を字統で引くと、強く打って後ろからおしのけるの意、拶は他をおしのけて争う意とある。挨拶と言う語は、古くは衆人がたがいに前に出ることを争うておし合う意であるとも記載されている。今では社交的に使うのであるから随分と雰囲気が違う。

▽国同士の挨拶も重要と感ずることが周辺諸島で起こっている。韜光養晦（とうこうようかい）なることばは国力が弱いときは、野心を隠して周囲を油断させて、力を蓄えると言う意味とのことで、これは隣国のアイコンタクトであったのか。目力も読めないとんだことになる。

▽生活規範の多くを彼の国の思想家の教えに拠って大事にしながら生きていると自分は感じている。日本大使公用車の国旗を奪ったり、日本企業を襲撃する民衆の乱暴さを見ると彼の国の行動規範は如何なものであろうかと違和感を感ずる。反日教育が徹底されている国に比べてわが国はどうであったろうか。そういえば中学・高校時代、明治時代までは日本史講義があったが、それ以後現代についての授業はなかった。授業時間不足のためと理解してきたが、現代史を整理しきれず若者に説明できなかったのが本当のところだったのだろう。

▽挨拶の意味を調べて古くは儀礼的なものではなかったことを知って、外交の重要性を知った最近である。

（独立行政法人国立病院機構東京医療センター　松本純夫　52回）